

Title	戦国簡に見える「鉦」字およびその関連問題について
Author(s)	曹, 方向
Citation	待兼山論叢. 哲学篇. 50 p.1-p.16
Issue Date	2016-12-26
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/70022
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

戦国簡に見える「鉞」字およびその関連問題について

曹 方向

キーワード…戦国簡／上博楚簡／鉞／陷／籛

一、「鉞」の文字学的分析

本稿は、中国の戦国時代の竹簡資料、すなわち戦国簡に見える「鉞」の字と、それに関連する問題について古文字学的検討を加えるものである。「鉞」の字については、『説文解字』に「鉞は、持なり。支に従い、金声なり（鉞、持也。従支、金聲）」とあるが、伝世文献では使用されている例がほとんど見られない。しかし、戦国秦漢の竹簡においては、これに関する字形が存在する。

「鉞」の字は、上海博物館蔵戦国楚竹書（以下、「上博楚簡」）の第八分冊に収録されている『命』の第三簡に見える（簡文は後文に掲載）¹。整理者はそれを「鉞」と釈読しているが、『説文解字』の「鉞」の字義と簡文とが合致しないため、これらは同じ文字ではないとする説が提示されている。また、『説文解字』の「鉞」の声符は「金」声では

なく、「支」声であるという説もある。⁽²⁾

清華大学蔵戦国竹簡（以下、「清華簡」）の第四分冊に収録されている『別卦』の第六簡に記されている卦名「𠄎」は、「金」「支」「心」で構成されている字であり、整理者はこれを『周易』の卦名によって「咸」と釈読している。⁽³⁾『別卦』では、多くの卦名が「心」に従って作られている。例えば、「革」は「𠄎」（下部は心）に作り、「随」は「𠄎」（下部は心）に作り、これらはいずれも「心」を偏旁として加えているものである。前掲の『別卦』の「咸」も、明らかに「𠄎」に「心」の旁を加えたものである。したがって、整理者がその上部を「鉞」と解釈するのは、従うべきであらう。

漢簡にも「鉞」に従う字が見える。例えば、銀雀山漢墓竹簡（以下、「銀雀山漢簡」）の『孫子兵法』黄帝伐赤帝（一七六号簡）には、「武王之伐紂、至於鉞遂」とある。白於藍氏は、この地名「鉞遂」と『国語』周語上に見える「聆遂」とは同じであり、伝世文献ではまた「戎遂」と称される、と指摘する。⁽⁴⁾「戎」は冬部に属す。形声文字の一般的規律から言えば、「鉞」「聆」の二字の基本声符はそれぞれ「金」「今」であり、いずれも侵部の字に属し、冬と侵とは韻が合うことから、通仮の条件は十分である。もし「支」声あるいは「耳」声に従うならば、冬部の「戎」の字とは字音に隔たりがある。清華簡『別卦』の卦名から見れば、『説文解字』の「鉞」字を分析して「金」声に従う字であると解釈するのは、正しいと考えられる。「金」は見母侵部、「咸」は匣母侵部であり、字音はかなり近い。上博楚簡『周易』と馬王堆漢墓帛書『周易』の中の「咸」卦および繫辭伝の「相感」の「感」には、いずれも「欽」と書かれている例がある。⁽⁵⁾また、『説文解字』では「欽」は「欠に従い、金声」でもあるとし、「鉞」の声符と同じであると考えることができよう。

『説文解字』を研究した清代の学者である段玉裁・桂馥・王筠らは、「鉞」は「擒」の異体字であるとする。また、

ある学者は「鉞」と「擒」とは同源字であると見なしている。⁽⁶⁾これらの解釈は、信じるに値するものである。『広韻』において「擒」と「擒」とは字義・字音が同じであることも、その証拠となろう。「鉞」を「擒」に作るのは、「救」を「掇」に作るようなものであり（『説文解字』の「救」は「攴」部に属するが、『漢書』ではしばしば「掇」に作る）、また「敷」を「揚」に作るのも類似の例であると考えられる（十三經注疏本『尚書』「明揚旻陞」の「揚」は、『説文解字』古文、および唐卷子本『經典釈文』尚書音義では「敷」に作る）。

二、上博楚簡『命』の「陷諫」について

続いて、上博楚簡『命』の「鉞」の字義について検討を加えていきたい。簡文には、「斧質に鉞すると雖も、命之れ敢えて違ふ勿し（雖鉞於斧質、命勿之敢違）」とある。ここでの「鉞」は「陷」と読むべきであると考えられる。

伝世文献や戦国簡牘の文字の中で、「金」声に従う字と「今」声に従う字とが通仮する例はしばしば見られる。「今」声に従う「擒」の字と「擒」とは字義や字音が同じであり、これらは良い例証となる。⁽⁷⁾また、「今」声に従う字と「陷」声に従う字とは通仮することができる。『説文解字』には「陷は、読みて含と同じ（陷、讀與含同）」とある。また、銀雀山漢簡『孫臏兵法』備勢の第三四九簡の「陷齒戴角」について、整理者は「陷」を「含」と読み、『淮南子』兵略訓の「含牙帶角」（口に）歯があり、（頭部に）角がある、の意）の例を証拠として挙げているのは、正しいと考えられる。⁽⁸⁾「陷」「陷」はいずれも「陷」声であり、「含」は「今」声に従う。『釈名』釈飲食には「含は、合なり、口を含みて之を停むなり（含、合也、合口停之也）」とあり、また『釈名』釈車には「銜は、口中に在るの言なり（銜、在口中之言也）」とある。学者たちは「含」と「銜」とは音義が近く、同源字であると見なしている。⁽⁹⁾

「鉷」と「銜」とはいずれも「金」声に従う。「銜」の同源字である「含」と「陷」とが通仮する以上、「鉷」の字も「陷」と読むことができる条件を備えていると考えられる。

「金」声に従う字と「召」声に従う字とは密接な関係がある。例えば、『説文解字』では、「欽」は「金」声に従い、「欠く」という意味であるとする。『集韻』には「欠は、不足なり（欠、不足）」とある。『説文解字』にはまた「欲」の字があり、「召」声に従い、「得んと欲するなり（欲得也）」と述べている。後者は『集韻』にも見え、「欲然として自ずから満足せざるの意（欲然不自満足意）」とある。段玉裁は、「欠は、倦みて口を張るの貌なり。之を引申すれば、乃ち欲然にして足らざるが如し、之を欽と謂う。……欽……欲は皆双声疊韻字にして、皆虚にして能く受くるを謂うなり（欠者、倦而張口之貌也。引申之、乃欲然如不足、謂之欽。……欽……欲皆雙聲疊韻字、皆謂虚而能受也）」と述べる。「欽」「欲」の字音・字義はかなり近く、同源字である可能性がある。⁽¹⁰⁾「欲」「陷」はいずれも「召」声に従い、「欽」は「金」声に従うことから、「金」声の字と「陷」声の字とは通仮することができると考えられる。

前述のように、清華簡『別卦』の「咸」卦の字は「鉷」に従い、上博楚簡の「咸」はまた「欽」に作る。このことから、「金」声の字と「咸」とは通仮することがわかる。伝世文献の中には、「咸」声に従う字と「召」声に従う字とが通仮する例もある。例えば、『楚辞』七諫では「罔軻」（また「軻軻」「坎圻」に作り、いずれも「カンカ」と読み、世間に認められない、あるいは志を得ないの意である）とあり、『文選』古詩十九首ではまた「軻軻」に作る。「罔（軻）」と「軻」はそれぞれ「召」「咸」を基本声符としている。

以上のことから、「鉷」は「金」声に従い、「陷」と読むことができると言えよう。

上博楚簡『命』の簡文の「陷於斧質」の意味は、肉刑あるいは死刑を受けるということであり、ある場合には直接

「死罪」と解釈することもできる。⁽¹¹⁾「斧質」については、伝世文献では「斧鑕」「鉞質」「鉞鑕」に作り、これは最高權力を表し、また誅戮の刑具を指している。『戦国策』燕策二では、蘇代が斉王に対して、「臣は斧質の罪有りて、自ら吏に帰して以て戮せらるるを請わん（臣有斧質之罪、請自歸於吏以戮）」と述べ、『史記』万石叔孫列伝には「罪あらば当に斧質を伏すべし（罪當伏斧質）」と言う。『春秋公羊伝』昭公二十六年の何休注には、「鉞鑕は、腰斬の罪なり（鉞鑕、腰斬之罪）」（腰斬とは、罪人の腰から下を斬りはなす刑罰のこと）とある。また、『史記』淮陰侯列伝には、韓信が連敖という官職に任ぜられた際、罪を犯して「斬られるべき」とされたが、滕公夏侯嬰に赦免され、釈放されて斬られなかった。この事件は、『論衡』骨相では簡略化され、「韓信は滕公の鑑する所と為り、鉞質を免ぜらる（韓信爲滕公所鑒、免於鉞質）」と記されている。すなわち、罪を犯して「斬られるべき」というのが、実は「陷於斧質」であり、死罪を免ずることが「免於斧質」なのである。また、「斧質」と同様に、「刀鋸」（かたなどのこぎり）も古代の刑具である。『国語』魯語に「大刑は兵甲を用い、其の次は斧鉞を用い、中刑は刀鋸を用い、其の次は鑕竿を用い（大刑用兵甲、其次用斧鉞、中刑用刀鋸、其次用鑕竿）」とあり、『宋史』呉及伝に「童幼何の罪あらん、刀鋸を陷えられんや（童幼何罪、陷於刀鋸）」とある。『宋史』の成立時代は比較的遅いが、文例として参考に値するであろう。

このことから、上博楚簡『命』の「雖陷於斧質、命母之敢違」の意味は、後世のいわゆる「冒死以聞」（死の危険を冒して諫言を行う）と同じことであろう。伝世文献に記されている先秦・秦漢の諫言を行う例から見れば、このような諫言こそ「陷諫」であると考えられる。『国語』魯語の「上陷而不振」の韋昭注には、「陷は、墜なり。君に過有るを見れば、明らかに身の墜つるを知り、斧鉞の誅を避けず、而して直に其の災害を陳ぶるなり（陷、墜也。見君有過、明知身之墜、不避斧鉞之誅、而直陳其災害也）」とある。

「陷諫」は、伝世文献に見える「五諫」の一つであり、「贛諫」あるいは「贛諫」とも称されている。以下、これに関する問題について検討を加えていきたい。

三、戦国秦漢簡の「陷」「贛」および伝世文献の「贛諫」について

伝世文献に見える「五諫」については、まず『白虎通』諫諍を取り上げたい。ここには、

人は五常を懐い、故に諫に五有るを知る。其の一に曰く諷諫、二に曰く順諫、三に曰く闕諫、四に曰く指諫、五に曰く陷諫。……陷諫とは、義なり。惻隱中より発し、直ちに国の害を言い、志を励して生を忘る。君の爲に身を喪うを避けず。

（人懷五常、故知諫有五。其一曰諷諫、二曰順諫、三曰闕諫、四曰指諫、五曰陷諫。……陷諫者、義也。惻隱發於中、直言國之害、勵志忘生、爲君不避喪身。）

とある。

『後漢書』李雲伝の李賢注にも「五諫」について述べられており、『白虎通』の条目や内容とほぼ同じである。類似の内容は、『說苑』正諫、『春秋公羊伝』莊公二十四年の何休注、『孔子家語』弁政などの文献にも見られる。⁽¹³⁾『說苑』正諫には、「一に曰く正諫、二に曰く降諫、三に曰く忠諫、四に曰く贛諫、五に曰く諷諫」とあり、何休注には「一に曰く諷諫、二に曰く順諫、三に曰く直諫、四に曰く争諫、五に曰く贛諫」とあり、弁政には「一に曰く諷諫、二に

曰く贗諫、三に曰く降諫、四に曰く直諫、五に曰く風諫」とある。その中の「贗」はまた「贗」に作り、これは通仮字である。「五諫」の項目を一覧にすると、表1のようになる。

表1 「五諫」異同表

出典	一		二		三		四		五	
	『説苑』正諫		正降		忠		贗諫		諷諷	
『白虎通』諫諍	指順		順				闕		諷	
『春秋公羊伝』何休注	直順		順		争		闕		贗諷	
『孔子家語』弁政	直降		降		諷		贗		風	

以上の各種の「五諫」の具体的な意味については、清代以前の古注では、『春秋公羊伝』何休注にそれぞれ一例が挙げられ、徐彦の疏もあるが、ここでは「五諫」に関する記述の異本については述べられていない。その他の各文献の古今注釈において、例えば清代の陳立『白虎通疏証』では、試みに各条目の対応関係を明らかにしており、その意味を具体的に示している。陳氏は、『春秋公羊伝』何休注および『孔子家語』弁政の「贗諫」は、『白虎通』の「陷諫」であると見なしており、これは従うべきである。陳氏の疏証では、

『後漢書』注に、「陷諫とは、国の害を言い、生を君の為に忘るるなり」と。『国語』魯語注に、「陷は、墜なり。君に過有るを見れば、明らかに身の墜つるを知り、斧鉞の誅を避けず、而して直に其の災害を陳ぶるなり」と。『公羊』注に「五に曰く贗諫とは、百里子・蹇叔子なり」と。案ずるに僖三十三年伝の「秦伯は將に鄭を襲

わんとし、百里子と蹇叔子叔とは諫めて曰く、千里にして人を襲うは、未だ亡せざる者有らざるなり」は、是れ
 贛諫の事なり。

〔後漢書〕注、「陷諫者、言國之害、忘生為君也。」「國語」魯語注、「陷、墜也。見君有過、明知身之墜、不避
 斧鉞之誅、而直陳其災害也。」「公羊」注、「五曰贛諫、百里子、蹇叔子也。」案僖三十三年傳「秦伯將襲鄭、百里
 子與蹇叔諫曰、千里而襲人、未有不亡者也」、是贛諫之事也。」

と述べている。⁽¹⁴⁾

陳氏が『國語』の注を引用して「陷諫」の「陷」であると解釈するのは妥当であると考えられる。特に、魯語の
 注の「不避斧鉞之誅、而直陳其災害」から見れば、古代の人々が述べる「陷諫」の「陷」は、上博楚簡『命』の「鉞
 (陷) 於斧質」の「鉞(陷)」であることを証明するに足るであろう。しかし、「贛／贛」と「陷」との間にどのよう
 な関係があるかについては、陳氏は論じていない。

『說苑』、『春秋公羊伝』何休注および『孔子家語』の「贛／贛」は、すべて「陷」と読むべきであると考えられる。
 『說文解字』には、「贛は、讀みて贛の若し(贛、讀若贛)」とある。字音が「贛」と近い「贛」は、その声符は「贛」
 であり、古文字ではもともと「贛」に作る。また、「贛」と「咸」とは字音が近い。その他、陳劍氏は、西周金文の
 「贛」字の右側はもともと「𠂔」に作り、戦国簡の文字では改めて「欠」に作るの、義符を改めて音符としたもの
 であると述べている。⁽¹⁵⁾ また、「贛」にも「欠」声に従う字と通仮する例がある。

『詩経』小雅・伐木の「坎坎鼓我」の「坎」の字について、『說文解字』は「贛」に作り、⁽¹⁶⁾「坎」は「欠」声に従う
 としており、「陷」「陷」ともともと同源字であると考えられる。⁽¹⁷⁾ 注目すべきは、「贛」は「今」「金」などと通仮する

可能性がある点である。例えば、「黔首」の「黔」は、上博楚簡『曹沫之陣』では「𨾏」に作る。「黔」は「今」声に従い、「鉸」の異体字である「擒」が「今」声に従うことも厳密な対応関係がある。前述のように、「戚」「欠」はいずれも「陷」と通仮関係にある。このことから、「𨾏／𨾏」も「陷」と読むことができると考えられる。

また、九店楚簡の日書『建除』の中には「𨾏＋天干」という固定の辞例が見られ、同じあるいは類似の内容が天水放馬灘秦簡・睡虎地秦墓竹簡・孔家坡漢墓竹簡などの戦国秦漢簡牘にも見えるが、「𨾏」に相当する字はすべて「𨾏」に作るか、「𨾏」声に従う字となっている。⁽¹⁹⁾例えば『建除』第十三簡の第一欄には、「建於辰、𨾏於巳、𨾏於午、坪於未、……」とあり、睡虎地秦簡の文字で表すと、「建於辰、陷於巳、彼於午、平於未……」となる。その中の「𨾏・彼」は「皮」を声符とし、「坪」は「平」を声符とする。「𨾏」「陷」はいずれも談部疊韻で、「𨾏」は溪母、「陷」は匣母であり、すべて喉牙音の声母に属することから、関係が密接であることがわかる。また、「𨾏」は「陷」の同源字である「坎」と読むことができるため、「陷」と読めるのは当然であろう。

以上のことから、「五諫」の中の「𨾏／𨾏諫」の「𨾏／𨾏」は、直接「陷」と読むことができると考えられる。

『説苑』などの伝世文獻に見える「𨾏／𨾏諫」は、宋代の薛據、清代の孫興衍が編纂した同名の著作『孔子集語』にも見え、文字は同じである。これらはいずれも『孔子家語』の王肅注の「𨾏諫は、文飾する無きなり（𨾏諫、無文飾也）」を引用している。⁽²⁰⁾また、『説文解字』には「𨾏は、愚なり（𨾏、愚也）」とある。これはいわゆる「措辭生硬」（融通が利かないこと）である。「𨾏」はもともと「𨾏」に作り、また「陷」と通仮することができるといふ現象は、魏晉以降の人々にとってすでに馴染みがなく、このことから王肅以降の学者たちも、「𨾏／𨾏諫」が「陷諫」であることを見落したのではないかと考えられる。

四、余論

以上、戦国簡の中の「鉸於斧鑕」の「鉸」だけでなく、戦国秦簡の文献中の「𢇛／𢇛諫」の「𢇛／𢇛」も、すべて「陷」と読めることが明らかとなった。一つの語が異なる字形によって記されるのは、戦国文字の中では特殊な例ではない。例えば、前述のように、『周易』「咸」卦の卦名は、上博楚簡『周易』では「欽」に作り、清華簡『別卦』では「𢇛」に作る。また、楚の大司馬である悼滑の「悼」の字は、包山楚簡では「𢇛・𢇛・𢇛」の三種の字で書かれ、伝世文献ではまた「邵／昭／召」「卓／淖」などと書かれている。⁽²¹⁾このことから、「陷」が戦国竹簡の中で「鉸」や「𢇛」などと書かれ、また伝世文献において「𢇛」「𢇛」に作ることは珍しくないと考えよう。しかし、このような用字習慣の改変は文献の抄写年代あるいは成立年代を知る手がかりとなる可能性があるため、十分注意しなければならない。

おそらく『説文解字』に引用されている『詩経』の「𢇛」の字は「古文」である。馬宗霍氏は『説文解字引詩考』において、「𢇛」字について「邵晋涵は坎と𢇛とが同音であり、許氏の拠り所は古本であると言う」と述べている。このいわゆる「古本」とは『詩経』の戦国古文字の写本を指す。

『説苑』が編纂された際に用いられた資料については、古文字の写本を含んでいた可能性もある。編纂者である劉向は「中古文」、すなわち当時の皇家が収蔵していた古文字の写本に触れていた。例えば、劉氏が校定した『易』『書』『礼』『楽』『論語』『孝経』の「叙目」では、「古本」について言及している。六芸以外の典籍（『管子』『晏子』『戦国策』など）については、「古本」があるかどうかは記していない。『説苑』の多くの篇はいずれも先秦時代の人

物や歴史事件・物語などを記しているため、その資料の中に古文字の写本が存在する可能性は、完全に否定しがたいと考えられる。

ただし、『孔子家語』については、状況がさらに複雑である。宋代以降、『孔子家語』は魏晉以降の偽作であると見なされていた。しかも、その偽作した人物は、初めて『孔子家語』に注釈を施した王肅、あるいは王氏の弟子たちであると考えた学者もいた。二〇世紀以来、河北省定州八角廊漢簡、安徽省阜陽漢簡などの文献の発見と研究により、『孔子家語』は王肅の時代に偽作された書物ではなく、漢初にはすでに流伝していた可能性が考えられるようになった。⁽²²⁾しかしながら、『孔子家語』を編纂する際に使用した資料の中に先秦時代の文献があるかどうかは、現時点では確定できない。このことは、『魏晉偽書』説が払拭された後に現れた新たな課題であると言えよう。

本世紀に入っても戦国竹簡の書籍が陸續と刊行され、研究が深く進められている。ある学者は、『孔子家語』のある部分の内容は先秦古籍と密接な関係があると見なしている。例えば廖明春氏は、『上博楚簡『民之父母』』を例に挙げ、『孔子家語』論礼のある部分は戦国古本によって作られたものであると見なしている。⁽²³⁾また、李学勤氏は、『孔子家語』好生に引用されている孔子が『詩経』甘棠を解説する箇所は、『上博楚簡『孔子詩論』』に淵源があり、またこれを『説苑』からの引用であると見なす旧説は適切ではないことを指摘している。ただし、李氏の結論では、『孔子家語』が『説苑』やその他の伝世文献に見られない孔子が論じた詩文の句をどのような経緯で引用したのかについてはわからない、と述べている。⁽²⁴⁾おそらく李氏は、『孔子家語』の中に先秦時代の文献が含まれているという結論を直接下すことを憚っているであろう。

『白虎通』は後漢時代に成立したが、そこには今文学派の説も古文学派の説も収録されている。ただし、『春秋公羊伝』何休注に引用されている「五諫」は、明らかに『白虎通』とは異なり、『孔子家語』と似ている。

本稿で検討した「𢇛／𢇛諫」について、仮に「陷諫」と対応するという結論が正しければ、その底本が戦国古本であるという可能性もある。前述のように、日書の中の戦国古文字の「𢇛」と秦漢簡の隸書の「陷」との間には対応関係がある。また、王肅注本『孔子家語』の孔序において、『孔子家語』には「古文奇字」（戦国時代の東方六国の特殊な文字）があると明確に述べている。これらを総合して考えれば、『説苑』と『孔子家語』の中の「𢇛諫」は、戦国時代の写本によって書かれたものである可能性がある。『白虎通』に見える「陷諫」と、『説苑』や『孔子家語』の「𢇛／𢇛諫」との対立は、今古文の差異から生じたものなのかどうか、これについては新たな資料が得られることを期待したい。

〔注〕

- (1) 復旦古大古文字專業研究生聯合読書会「上博八《命》校読」、復旦大学出土文献与古文字研究中心網 (<http://www.gwz.fudan.edu.cn/>)、二〇一一年七月一六日。
- (2) 范常喜「上博八《命》三号簡帛字一則」、武漢大学簡帛研究中心簡帛網 (<http://www.bsm.org.cn/>)、二〇一三年六月二三日。また、前掲「上博八《命》校読」参照。
- (3) 清華大学出土文献研究与保護中心『清華大学藏戰国竹簡(肆)』(中西書局、二〇一三年二月)、一三〇頁、および一三三頁注釈二六。
- (4) 白於藍「銀雀山漢簡校釈」、『考古』二〇一〇年第二期、八一～八二頁。
- (5) 白於藍『戰国秦漢簡帛古書通假字彙纂』、九一〇頁。
- (6) 劉均傑『同源字典再補』、一九一頁。
- (7) 「擒」の声符は「今」である。これは甲骨文字の字形とも合致している。なお、馬王堆帛書『十六經』ではしばしば「黃帝が蚩

尤と戦って蚩尤を擒とする」という文が見えるが、その「擒」の字は『十六経』五正篇では「禽」に作り、正乱篇では「倉」に作る。「倉」の上部は「今」字である。この字形については、陳松長『馬王堆簡帛文字編』（文物出版社、二〇〇一年九月）、一六九頁参照。

(8) 銀雀山漢墓竹簡整理小組『銀雀山漢墓竹簡(一)』、『釈文注釈』六三頁。

(9) 王力『同源字典』、六〇五～六〇六頁。王国珍『釈名語源疏証』、一三九～一四〇頁。

(10) 劉均傑『同源字典再補』、一九七頁。

(11) 『管子』白心に「爲不善乎、將陷於刑」、その注に「爲不善、又恐陷於刑罰也」、「韓非子」八説に「然而弱子有僻行、使之隨師。有惡病、使之事醫。不隨師則陷於刑、不事醫則疑於死」、「淮南子」汜論訓に「今人所以犯囹圄之罪、而陷於刑戮之患者、由嗜慾無厭、不循度量之故也」などとあるのを参照。

(12) 沈家本『歷代刑法考』第一冊、一一五～一一六頁。

(13) 『後漢書』李賢注の原文は以下の通り。「五諫、謂諷諫・順諫・闕諫・指諫・陷諫也。諷諫者、知患禍之萌而諷告也。順諫者、出辭遜順、不逆君心也。闕諫者、視人君顔色而諫也。指諫者、質指其事而諫也。陷諫者、言國之害、忘生爲君也。」向宗魯『說苑校証』、二〇六頁参照。

(14) 陳立『白虎通疏証』、二三五～二六六頁。

(15) 陳劍『釈西周金文的「𠄎」字』、同氏『甲骨金文考釈論集』、線裝書局、二〇〇七年五月、八～一九頁。

(16) 馬瑞辰『毛詩伝箋通釈』、五〇九頁。また王先謙『詩三家義集疏』、五七四頁参照。

(17) 王力『同源字典』、二八〇～二八一頁。

(18) 白於藍『戦国秦漢簡帛古書通假字彙纂』、九二二頁。

(19) 『九店楚簡』、六四頁。また、楊沢生『上博五零釈十二則(簡帛網二〇〇六年三月二〇日)』、白於藍『戦国秦漢簡帛古書通假字彙纂』(九二〇頁)も参照。

(20) 楊朝明『孔子家語通解』、一七二頁。また、薛昶『孔子集語』卷上「六芸第七」、孫興衍編『孔子集語』卷七「臣術六」、趙善詒『說苑疏証』、一三九頁、左松超『說苑集証』、七三〇～七三一頁、孟慶祥・孟繁紅『孔子集語詁注』(上)、二七〇頁など参照。

- (21) 李天虹「敞倉一号墓主・墓葬年代考」，《歷史研究》二〇一四年第一期，一六一～一六九頁。
- (22) 胡平生「阜陽双古堆漢簡与《孔子家語》」，《國學研究》第七卷，五一五～五四五頁。
- (23) 廖明春「從上博簡《民之父母》「五至」說論《孔子家語》論礼的真偽」，《湖南大學學報（社會科學版）》二〇〇五年第五期。
- (24) 李学勤「《家語》与上博簡《詩論》」，《齊魯學刊》二〇一五年第一期，四四～四五頁。

〔參考文獻〕

- 白於藍「銀雀山漢簡校釈」，《考古》二〇一〇年第二二期。
- 白於藍「戰國秦漢簡帛古書通假字彙纂」，福建人民出版社，二〇一二年五月。
- 曹方向「上博簡所見楚国故事類文獻校釈与研究」，武漢大學博士論文，二〇一三年五月（指導教員：李天虹教授）。
- 陳劍「釈西周金文的「𠂔（𠂔）」字」，《甲骨金文考釈論集》，線裝書局，二〇〇七年四月。
- 陳立「白虎通疏証」，中華書局，二〇〇七年一〇月。
- 段玉裁「說文解字注」，浙江古籍出版社，二〇〇六年一月。
- 范常喜「上博八《命》三號簡釈字一則」，簡帛網，二〇一三年六月二十三日。
- 復旦吉大古文字專業研究生聯合読書会「上博八《命》校読」，復旦大學出土文獻与古文字研究中心網，二〇一一年七月一六日。
- 湖北省文物考古研究所・北京大學中文系「九店楚簡」，中華書局，二〇〇〇年五月。
- 胡平生「阜陽双古堆漢簡与《孔子家語》」，《國學研究》二〇〇〇年第七卷。
- 李学勤「《家語》与上博簡《詩論》」，《齊魯學刊》二〇一五年第一期。
- 李天虹「敞倉一号墓主・墓葬年代考」，《歷史研究》二〇一四年第一期。
- 廖明春「從上博簡《民之父母》「五至」說論《孔子家語》論礼的真偽」，《湖南大學學報（社會科學版）》二〇〇五年第五期。
- 劉均傑「同源字典再補」，語文出版社，一九九九年一〇月。
- 馬承源主編「上海博物館藏戰国楚竹書（八）」，上海古籍出版社，二〇一一年五月。

- 馬瑞辰『毛詩伝箋通釈』、中華書局、一九八九年九月。
- 孟慶祥・孟繁紅『孔子集語詁注（上）』、黒龍江人民出版社、二〇〇三年一月。
- 清華大学出土文献研究与保护中心編・李学勤主編『清華大学藏戰國竹簡（肆）』、中西書局、二〇一三年二月。
- 沈家本『歷代刑法考』第一冊、中華書局、二〇〇六年七月。
- 王国珍『釈名語源疏証』、上海辭書出版社、二〇〇九年八月。
- 王力『同源字典』、商務印書館、一九八二年一〇月。
- 向宗魯『說苑校疏』、中華書局、一九八七年七月。
- 楊朝明『孔子家語通解』、万卷路樓圖書股份有限公司、二〇〇五年三月。
- 楊沢生『上博五零釈十二則』、簡帛網、二〇〇六年三月二〇日。
- 銀雀山漢墓竹簡整理小組編『銀雀山漢墓竹簡（壹）』、文物出版社、一九八五年九月。
- 趙善詒『說苑疏証』、華東師範大学出版社、一九八五年二月。
- 左松超『說苑集証』、台北文史哲出版社、一九七三年二月。

〔附記〕

本稿の執筆および日本語翻訳の過程中、湯浅邦弘教授（大阪大学大学院）、草野友子博士（京都産業大学特約講師）、梶島雅弘氏（大阪大学大学院文学研究科博士後期課程）よりご教示・ご助力を賜った。この場をお借りして感謝申し上げたい。

本研究は、日本学術振興会科学研究費補助金・特別研究員奨励費（SPS KAKENHI Grant Number 26・04302）、中国教育部青年基金項目（15YJC77003）、中国国家社科重大項目（10&ZD089）および漢語海外伝播河南省協同創新中心の助成を受けたものである。

（文学研究科招へい研究員・日本学術振興会外国人特別研究員・安陽師範学院文学院講師）

摘要

戰國簡“鉞”字及相關問題試探

曹 方向

《說文解字》謂“鉞”從“金”聲，以傳世文獻無用例，後人疑之。今據戰國秦漢簡所見，“鉞”從“金”聲蓋無可疑。以字形論，即“揜”、“擒”異體。其例在清華簡《別卦》讀為“咸”卦之“咸”；在上博簡《命》讀為“陷”，其文“陷於斧質”謂冒死進諫，即《白虎通》所見“陷諫”。典籍“陷諫”，即《說苑》、《孔子家語》之“戇諫”。自何休注《公羊傳》、王肅注《孔子家語》以降，學者每以“陷諫”、“戇諫”區別作注。其實據戰國秦漢簡，“陷”、“戇”例得通假，內涵相同。以古文字學論，“戇”所從音符“贛”，古文本作“𨾏”，從“欠”聲。《說文解字》以為古文“坎”，彼此適為互證。用字既合於古文，或於考論《孔子家語》成書不無裨益。